

長野県コミュニティスクール検討会 発言要旨

日 時 令和6年7月10日(水) 午前10時～正午

場 所 オンライン開催

出席者 上沼 昭彦、河西 哲也、塩原 雅由、城村 義人、傳田 智子、早坂 淳
伴 美佐子、堀田 茂樹

1 開会

○市村課長

只今から、第4回コミュニティスクール検討会を開会いたします。進行を担当させていただきます生涯学習課の市村です。どうぞよろしく願いいたします。

本検討会参加の皆様方におかれましては、大変ご多用中のところ、参加いただきありがとうございます。本日は長野県教育委員会武田教育長も参加いたします。皆様、よろしく願いいたします。

それでは、検討会に先立ちまして、長野県教育委員会武田教育長からご挨拶を申し上げます。

2 教育長あいさつ

皆さん、おはようございます。長野県教育委員会教育長の武田育夫でございます。本検討会にご出席の皆様におかれましては、ご多用の中ご出席をいただき誠にありがとうございます。

また日頃より本県の教育行政に対しご理解、ご支援いただいておりますことを厚く御礼を申し上げます。

5回を予定しておりましたコミュニティスクール検討会も残すところあと2回となりました。これまで検討会出席の皆様には真摯なご検討をいただき誠にありがとうございます。

長野県は南北に長く、谷の深い地域でございます。信州教育は地域と共にあったと言っても過言ではないのではないかと思います。特に中山間地の学校には特色ある学校づくりが行われておりました。地域づくりの中核には学校があり、学校が地域のコミュニティの中心でございました。私が教員になった頃、40年以上前、昭和56年になりますけれども、よく先輩の先生に「地域に根を張れ」ということを言われたものでございます。

しかし、ここ30年から40年の間に学校は閉じられ、地域から距離を置くようになったというように私は思っています。「なぜそうなったのか」ということが一番の問題ではないか。

現在、「学校は変わらなければいけない」と私も強くそう思います。それはコミュニティスクールを国型にするとか、信州型がいいとか、そういう議論ではなくて、子ども達にとってどうすべきか、地域にとってどうすべきか、という議論であるというように私は思っています。

長野県の学校をこれからどうしていったらいいのか。皆様方の活発なご議論をいただき、アイディアをいただけたらありがたく思います。よろしくお願いいたします。

3 協議

○市村課長

意見交換に入っていきたいと思います。ここから早坂座長、進行をお願いいたします。

○早坂氏

座長を仰せつかっております早坂でございます。皆さんこんにちは。

全5回の検討会もこれまで、多様な議論を蓄積しながら、本日第4回を迎えることができました。今日もこれまでと同様に、あるいはさらに熱い形で、それぞれのお立場から長野県のコミュニティスクール、どうしていったら良いのかという点について、皆さんから積極的にご議論、ご発言をいただけたらと思っております。

本日から武田教育長にもご参加いただけるということで、より一層の盛り上がり期待できるかなというところがございます。

なお、これまで私達のこの検討会では、立場を超えて、横並びの平等・並立な関係性の中で自由に発言ができるということをとっても大事にしていまいりました。そういった狙いもあって、それぞれの先生方、あるいはお立場、皆さん、肩書きがおありですけれども、さん付けで共通してお名前を呼ばせていただいております。今日は教育長も含めまして皆さんを今までとおおり、さん付けでお名前を呼ばせていただきたいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは事務局から前回の振り返り、また本日議論すべき論点につきましてご説明をいただけたらと思います。

○事務局

それでは事前に配らせていただきました事務局説明の資料をご覧くださいながらお聞きいただければと思います。

それではスライドをご覧ください。

全国的に見ても、コミュニティスクールは、地域と学校を取り巻く課題解決のプラットフォームとしての役割を期待されております。現在、長野県においても、地域、学校における課題が山積しておりますが、それぞれの課題に対して、県内の学校においても、課題解決に向けた実践が報告されています。

とは言っても、課題解決には難しさがあり、現在コミュニティスクールの取組において、どんなことが必要かを考えたとき、信州型コミュニティスクールにおいても、国型コミュニティスクールにおいても、地域住民等による学校運営参画の充実が必要であると考えておりました。

そこで、昨年度よりコミュニティスクール検討会を開催し、「学校運営参画の意義」「有用性」についてご検討いただきました。第1回、第2回の検討会では、それぞれ関わりのある学校

や地域団体、これまでの実践から「学校運営参画の意義や有用性」についてご意見をいただいたところです。スライドはこれまでのご意見の一部をまとめたものになっております。

第3回検討会では、学校運営参画の充実を実現させる上で課題となっていることは何かをテーマに検討を行いました。出てきたご意見をまとめたものが以下のスライドです。

中でも「地域連携の度合いについては、ばらつきがある」には、皆様の多様な視点からのご意見をいただいたところであります。

地域と学校の連携・協働の度合いには、学校ごとにばらつきが見られます。地域も学校も最初から連携・協働のスペシャリストではありませんし、その年に集まった委員の皆様によっても経験が異なっております。また、それぞれの学校運営委員会、学校運営協議会でどのような活動を行い、どのようなことを話し合ってきたかによっても、熟度・練度に違いが出てまいります。

そのような熟度・練度には段階があり、活動を積み重ねていくことによって、段階を上げていくようなプロセスがあるのではないかといったご意見をいただいたところです。

また、コミュニティスクールについて議論するに当たって課題となることは、多様な考え方が一つの場に混ざり合い、論点が複雑になってしまいがちということです。参加者によっても、経験も考え方も様々であり、コミュニティスクールに対する考え方も多様です。その多様性がもたらすメリットもありますが、先ほど述べたように論点が一つに絞りにくいといったデメリットもあります。

第3回のまとめでは、その課題に対して、「自分達の学校がどうなっていて」「何をしています」「ここから先どこに向かっていけばいいのか」を可視化する必要があるのではないかとといったご意見をいただいております。

熟度・練度の可視化の方法の一つとして、早坂座長からお示しいただいたのが、ロジャー・ハートの「はしご論」です。

このロジャー・ハートの「はしご論」を参考に、本課で作成したものがこの「学校運営参画のステージ」です。地域の方々が学校運営に参加している段階を、「形式的な参加」「自主的な参加・参画」「対等な参画」に分けてあります。

各ステージの四角の中に、学校運営委員（学校運営協議会委員）の関わり方を書き出してみました。各学校（委員）の皆様が、自分はそして自分が参加している委員会（協議会）がどうなっているのかを振り返るためのツールとして作っております。

形式的な参加の段階では、委員会の方々が「委員会（協議会）に参加している」「委員会（協議会）で指名されるなどして発言をしている」「促されて学校との活動に参加している」といった段階です。

自主的な参加・参画の段階になると、委員の方々が「どんな子どもの姿を願うか（『目指す子ども像』）の決定について積極的に関わっている」「自主的に学校（地域）との活動に参加している」「自分が関わった活動について振り返りをしている」状態です。

対等な参画の段階になると、委員の方々が「学校課題や地域課題を委員会（協議会）で議題とし、その解決に向けて話し合っている」「地域学校協働活動が教育目標にリンクしている」「学校とボランティアが地域学校協働活動に係る授業づくりを共にアイデアを出しながら行っている」「目指す子ども像の実現に向けての活動を学校と連携しながら、地域主体で実施している」といった状態です。

学校運営参画のステージを移行することによって、学校がどのような姿になっているかをまとめたスライドです。学校と地域の関係は、「地域ボランティアの方々から支援を受ける」から「地域ボランティアと共に学校づくりを行っていく」そんな関係に変化していくと考えております。

では、このようにそれぞれのステージへ移行していくためには、どんなことに取り組んでいく必要があるでしょうか。

形式的な参加から自主的な参加・参画へと移行するためにどんなことが必要でしょうか。担当課で案を作成してみました。

- ・委員と子どもが関わる機会を増やす
- ・学校運営委員会（協議会）の議題設定を学校とコーディネーター、委員で検討をしてみる
- ・学校課題を議題として取り上げ、解決方法を検討する
- ・「こうしたい」「こうなるといいな」といった夢を語る機会を設ける
- ・ボランティアの居場所（空間・役割）を学校の中につくる
- ・信州型コミュニティスクールアドバイザーの利用

といった取組が考えられます。

では、自主的な参加・参画から対等な参画へと移行するためにどんなことが必要でしょうか。

- ・委員が主体の地域学校協働活動の企画・運営
- ・地域課題を議題として取り上げ、解決方法を検討
- ・活動の振り返りと次年度の活動を語る機会を設ける
- ・委員、ボランティアの活動における権限を高める
- ・学校の地域も共にわくわくできる活動が行えないか話し合ってみる

このような取組が必要ではないかと考えております。

第1回、第2回でお話しいただいた学校運営参画の意義については、学校運営参画のステージが対等の参画へ近づくほどに実現が可能であると考えております。本日の検討会では、それぞれのステージから次のステージへと移行するための方法。どうすることが、学校運営参画を対等な参画へ移行していくかについてご検討いただければと思っております。

よろしく願いいたします。

○早坂氏

これまで私達がこの検討会で議論してきた内容を、三つのステージとして見える化していただいたと、文言等についてはそれぞれの立場でより適切な表現を見つけることができるかなと思いますので、あくまでも本日提示させていただいた内容については、たたき台だということでご理解をいただけたらと思います。

また、先ほどの3ステージにつきましては事前に皆さんとぜひ共有しておきたいと思うポイントがあります。私達が今向き合っている様々な教育にまつわるこの外側の世界は、常に複雑です。様々な事象が絡み合って、またそれぞれの複雑さを私達が個別に違った角度から見てきているのでなかなかこの世界の全体像がどうなっているのかが、私達全員に共有しにくい。そのくらい世の中はやはり複雑にでき上がっています。

この複雑さをある程度縮めて、いわゆるモデル化をして、今私達がやっている地域や学校での教育活動がどこに位置づくのかを、ぱっと視覚的に見えるようにしたのが今回のステージの特徴になっています。分かりやすくしているがゆえに、逆に大事なものがそぎ落とされてしまっているところも、もしかしたらあるかもしれません。それぞれのお立場で、ここの表現、もっとこういった表現の方がいいのではないかとか、あるいは根拠となっているロジャー・ハートの「はしご論」は8段階でしたので、これを三つにより単純化するこの形が果たしてどうなのか。

皆さんがそれぞれ今関わられている地域や学校の教育活動に照らし合わせていただいて、どれだけあのモデルに現実が落とし込めそうか、その視点で多様なご意見をいただけたらと思います。今、私達が向き合っているこの現実を全員で共有して、一步でも前に進めていくための足がかりとなるといいなど、そのように願って作ったものでもございます。

ということで本日の論点は、大きく分けると二つあるかなというところでしょうか。一つ目は今、事務局から説明いただいた三つのステージ。それぞれの文言やステージ間の関係性、ステージ1から2に移行するときのトライのあり方、そういった観点で多様なご意見をいただきたいというのが論点の一つ目です。

二つ目は、冒頭教育長の武田さんからもご発言をいただいたとおり、私達がここで議論するのは、制度としてのコミュニティスクールではありますが、国型にした方がいいのか、信州型でもいいのかという制度そのもの話というよりは、信州の教育をどうしたらより良い形にできるのか。子どもにとって、地域にとって、そして学校職員にとって、それぞれの立場にとって、よりよい教育のあり方を考えるという視点で、我々はここまで議論をしてみました。

これをより良くするために、信州型、国型という制度の話に立ち戻った時に、やはり国型でなければ、より良い教育に進めないのか。あるいは信州型でもかなりのところまでいけるからこのままでいいのか、その辺についても是非、皆さんのお立場からご議論いただきたいなと思っています。

ということで、前半の論点。まずは先ほど事務局から提示していただいた三つのステージに関して皆さんからご意見をいただきたいなと思います。

○城村氏

今日は、教育長の武田さんも一緒ということで本当に嬉しく思っています。

今回、資料を見させていただいたり、これまでの過去の回も確認をさせていただいてる中で、ステージ1から2、3というところでの参画のステージですよね。ご質問の意図に合っているかわかりませんが、これまで議論してきた中で、やはりこの教育的な視点からの「コミュニティスクール」というところもとても大事であると同時に、先生方学校サイドの働き方改革の視点からのコミュニティスクールのあり方もやはりとても大切な視点かなと感じています。第1回以来再三この話が出ていると思うのですが、やはり学校・先生方はコミュニティスクールが大事だとわかっているけれども、それは正義だけれども、実際そのストレスや負担感があるだろうなというところはやはり見逃せない、見過ごすことができないところかなと。そうなった時に、私はPTAですが、先生方の働き方、より良い環境を作っていく、先生方にメリットのある形を目指すこともコミュニティスクールの視点として結構大事かなと思っています。

PTAの立場で申し上げると先日いろいろ会議があって、内部で様々な話をしていますが長野県PTAとしての今後の価値提供として、学校あるいは教職員・先生方の働き方を本気で支えていくPTAを目指そうよということを、ちょっと話をしているところです。

これはまた県教委の皆さんとも話を詰めていけたらなと思っていますけれども、PTAとしてそのあたりの先生方の働き場の環境を支えていくということで、コミュニティスクールというところの突破口であったり、先生方がより心を開いて、学校の門戸が開いてくるところをPTAとして関わることができないかなと考えているところです。

○早坂氏

教員にとってのメリットは何か、ここが信州の先生方の腹に落ちていかないと、私達のこの長野県で、コミュニティスクールを進めていくことはできないだろうなと、私もそのように思っています。そんな中、長野県PTAの価値提供、PTAとして学校を本気で支えていく。とても心強い言葉をいただいたなど、そんなふうには学校の先生方に思われているのではないかなと思います。働き方改革の視点でぜひご意見をいただきたいなと思います。今、先生方は本当に忙しいです。また、人もおりません。

療休・産休・育休の先生方の穴を埋める先生も、代替の先生もなかなか見つからない。そのような声が県全域から聞こえてくるような状況の中で、さあ地域連携のお仕事もプラスでやってみようと言われたときに、なかなか重い腰が上がらないという現状も確かにあるのかなというところです。ここについては、今まさに学校で校長先生、教頭先生をやられている先生方、働き方改革の観点で、教員にとってのメリットにちょっと絡めながら、もしご発言いただけたらありがたいなと思いますが、河西さん、堀田さんいかがでしょうか。

○河西氏

画面共有をさせていただきます。前に見ていただいた子どもと地域の必要感を重ねるという説明をした資料ですけれども、私は地域連携のポイントを今まで子どもと地域に必要感を重ねることだ、というようにお話ししてきましたが、この機会が特にきっかけになっていますけど、話しているうちに一番重要なのはやはり地域から子どもへ「ありがとう」と「笑顔」による本気のプラスのフィードバックがあること。これがあるから地域連携は本当に回ってくるのだなということが話しながら分かってきて、一番のポイントはこれではないかなと。今日の事務局からのスライドの四つ目でしょうか、今自分達がどうなっていて、何をされていて、ここから先どこに向かっていけばいいのかという、そこに可視化が必要と書いてある、そのどこへ向かっていけばいいのかに関わって、いろんな地域とか活動とか関わりなどがありますが、その活動の終わりには、本当に地域の人が、例えば、この間話をしたそのお年寄りのお宅へ行ったらお年寄りが「もう来てくれた」、子ども達に泣きながら「ありがとう」と語ってくれる姿、その姿があるだけで、子ども達は本当に来てよかったな、関わってよかったな、私達役に立つんだ、というこの自己有用感を肌で感じて、それが次の活動へのエネルギーになるという話をさせていただいたんですが、この学びのサイクルを子ども達自身が感じられる地域連携になるべきだ。主体的に学ぶということがこういうことなんだ。感動と共に次のやる気が湧いてくるという、そういうサイクルを子ども達自身が体感すると共に、その姿を見て先生達も我々の支援というのはそうあるべきだと。そうすると前に話しました地域連携だけではなくて、授業そのものも変わっていくだろうと。最初に、今日はこれやるんだよと、先生が言うんじゃなくて、やはり子ども達が心から疑問を持つように支援をして、授業の終わりにはその答えを子ども達書けるような流れがあって、子ども自身が自己評価できて、次また頑張りたいと思える、そのような授業にしなければならないと先生達が思える。そのこと自体は先生達にも絶対メリットになると思います。それからこの本気のフィードバックに繋げる一つの方法で、一番手っ取り早い方法が子どもと地域の必要感を重ねるという視点だなど、これ以外にもあると思いますが一つの視点がこれだなど。

この地域の必要感に重ねると、地域の人達がアイデアをたくさん出してくれる。子ども達も、その地域の人達からの「ありがとう」をもらいながら、やる気になって、次はこうしたい、ああしたいと、どんどんアイデアを出すようになる。そうすると、地域に開かれたカリキュラムという観点からすると、先生だけではなく、地域の人も子ども達も一緒にカリキュラムを作っていくという状況が自然に生まれるので、そうすると先生達の働き方改革からすると、地域連携のカリキュラムを作ることはすごく負担なんですよね、何も無いものをゼロから先生達だけで作ろうとするとすごく負担なだけけれども、本当に地域連携を回すことができれば一緒にカリキュラムを作ってくれるので、間違いなく働き方改革になるのではないかと思います。

○早坂氏

これまで重ねて河西さんからは地域と子どもとの必要性を重ねるという言い方で、このコミュニティスクールの教員にとってのメリット、子どもにとってのメリット、そして地域にもメリッ

トがあるってこの三方良しのコミュニティスクールの可能性について、これまでも語っていただきましたが、改めて重要なポイントをご提示いただきましてありがとうございます。

子どもの自己有用感ですね。私達の学校に限らず、学校ってというのは世界に行って我々が学んでおかなければいけないものを断片化して、評価の中に落とし込んで、教科書の中に落とし込んで、ちょっと現実から1回引きはがして個別に学びができるように、学校の教室の中で学びができるように設計されているわけですがけれども。そのメリットと、デメリットで言った場合、その子の学びが世界と地域と、あるいはすぐ学校の外とどう繋がるんだろうというところに、いまいち子どもの腹落ちが、学びたいという意欲そのものが湧きにくい仕組みになっていることは確かかなと思います。これを泣きながら地域の方が「ありがとう」と言ってくれる、本気でフィードバックを返してくる。つまり、自分達が学んでいること、やっていることに世界が反応してくれるということが、子どもにとってどれだけ大きなことになるのか、そこについてご説明いただきました。

堀田さんのご意見もぜひ聞きたいなと思いますが、お願いしてもよろしいですか。

○堀田氏

先ほど城村さんが、教員が大変で、働き方と言ってくださって、その言葉でとてもほっとするところがあります。本当に学校現場は大変です。今、中学校に来ているのですけれども、授業もありますし、生徒指導もありますし、まだ部活も残っていますので、先生方は放課後になると部活に行きます。休んだ子の連絡を部活が終わってから取ったりとかですね、本当に朝から晩までよくやってくさっています。大変であります。そこに地域連携もやってくださいと、それ単独で考えているとさらに負担は増すのだらうと思いますが、先ほどの河西さんの話もそうですが、この有用感を生徒も、また先生方も感じると、これは負担にならないのではないかと考えています。例えば地域連携だけではなく、単独ではなくて、総合的な学習と絡めてスタートし、それが広がって行って、地域連携に行く。それに地域からも感謝の言葉を言われたりとか、こちらもやってよかったなという思いが出てきたり、そういうプロセスが繋がっていくと、やってよかったと、やはり有用感にたどり着くんですね。そして、またさらに活動したいなという意欲が出てくると。こういうものが出てくると、これはもう負担ではなくて、次のステップに繋がっていくことになるので、本当に有用感が働き方改革にも繋がっていくのではないかと考えています。さらにそれを出すには、今日三つのステージに自分はずごく納得していて、この前の早坂先生の講演を聞く機会があり、そこでもこれだと自分の中で納得したものがあり、それをまた後でお話させていただきたいなと思いますが、その中で形式的な参加をしている、またそういう教員もそういう段階であつたら、それはもう負担でしかありません。ですが、これがさらにステージが上がってどんどん参加して下さったり、対等な立場までいくと、先生達どうこうではなく、地域の方がどんどん参画して下さるので、負担はかなり軽くなっています。

なので、ここまで上がってくると、負担、負担ではなくて、学校にとって本当にありがたいものになっていきますので、何とかこのステージのここまで上げられるようなことを考えられればいいなと自分は思います。

○早坂氏

学校現場が本当に大変であるという現状の確認。その上であっても、先生達の抱えている負担感を充実感に、子ども達の学びをやらされているものから有用感に変えていく、非常に大きなきっかけをコミュニティスクールは提供してくれると、またこれは働き方改革にも結果として繋がっていくというお話をいただきました。

その上で私が今すごく知りたいなと思ったことがあるのですが。それは何かというと、先ほどのステージの最初の段階、形式的な参加をしている学校の先生、あるいは形式的な参加、言われたから来ているよと言う地域の方あるいは保護者、そういった自主的にというよりは仕方がないかな、やらないといけないかなと思いつつやっている方が抱えている負担感というのがどうしても最初のステージではあるわけですね。この最初のステージで抱えてしまう負担感を乗り越えた先にとつともなく大きな充実感や有用感が待っているのだとして、ただこの負担感にやはりどうしても押し潰されてしまう方もいるのではないかと。もう毎日が忙しすぎてですね、大変なことが多すぎて、なかなかその先を見るよりは、今をどうにか生き残らなければいけないという現実もあるのかなと思うのですが。そうなったときに、やっぱり伴走的な支援、例えば市町村の教育委員会に何ができるか、あるいは長野県教育委員会として県内の学校にどのようなサポートができるか。あるいは地域の人として公民館としてこういった形で学校をみんなで支えていけるのかという議論が次にやはりどうしても必要になってくると思うのですが、その観点でいくと、教育委員会がその負担感を抱えている学校、今はこの先大変だけどこの先に待っているものがあるからという支援のあり方、例えば、塩原さんはどんな支援のあり方が市町村の教育委員会として可能なのかということ、これまでのご経歴等々から何か、答えを教えてくださいな気がしたのですが、いかがでしょうか。

○塩原氏

教育委員会として何ができるのかというお話ですけれども、資料の中のステージに形式的な参加というのがございます。ここに不足しているものがあるとすれば、それを挙げるとすれば、学校の校長先生の経営ビジョンの不足、これが挙げられるのではないのかなと思います。そのように考えていくとすればですね、はしごの1段目に上がる、0から1を考えてみる必要があるのではないかなと思っています。大町市教育委員会としてはその0から1への移行を図るために、校長先生のビジョンづくりを教育委員会が支援したということになります。

そんなことを教育委員会としては考えてみたらどうかと思います。

○早坂氏

学校長の経営ビジョン、ここにステージがあるのではないかというお話ですよ。その視点は、おっしゃられると確かに大事な論点だなと。むしろそこがカギになるような、これまでも重ねて、塩原さんからは学校がまず変わるんだ、校長が変わるんだということは重ねておっしゃっていただいていたので、それをステージにしっかり盛り込みながら、より現実が当てはまるようなモデルとして作っていったらと思います。0から1の段階のステップというところですね。

今日は教育長の武田さんにもご参加いただいています、オブザーバーとしての立場ではないのです。ご発言もいただけると伺っておりますので是非これまでの長く深い教職のご経歴の立場から、城村さんから始まった学校の負担感の問題とコミュニティスクール、あるいは地域と繋がることのメリット、そこで何か感じられていることをご発言いただけたらと思いますがいかがでしょうか。

○武田教育長

二つあるのですが。一つは教師の負担感の問題ですが、私が思うに負担感の前に先生達に必要な感があるのかという問題です。必要感のない人達がやらされれば、それは当然負担になるわけで。そうすると負担感を論じる前に、先生達にこのことの必要感というのをどう感じていただくかということがあるんですけども。その時にどうしても先生達の必要感の裏側で引っかかってくるのは、教師の専門性ということですね。教員は専門職である。何の専門職であるのかということをし少し置いておいて、先生達が集まってみんなで決定した学校運営計画が、例えば地域から呼ばれてきた何らかの人達によって、否定されたり否決されたりするようなことが起こってきた時に、先生達の専門性って何だろうということですよ。先生達の考え方の根っこに何かがあるかということをし十分知らずに、地域の人達と協力して授業をやりなさいっていうのは少し先生達にとっては納得しにくいこと。その説明が、信州型コミュニティスクールの時も国型のコミュニティスクールにも十分できていなくて、形を先にこういうことをやりましょうと出てくるので、先生達にはなんでこんなことやるんだという、必要感に対する疑念が根っこにあるから、それがあがる間は負担感を決して拭えないだろうなと思います。そういった必要感を先生達に植え付けていく一つのアプローチは、今、塩原さんがおっしゃった校長の経営ビジョンだというように思います。うちの学校はこういう学校を作っていくんだ、という。そして先生達の専門性、先生達はこういうことを学校づくりの上でやっていただくんだ、ということが十分承知をされていない先生達にとっては、もうこれは負担以外の何物でもない、というのが私の感じる一点目ですね。

二つ目に感じることは、地域の方が学校運営に参画していくってことは一方であって、非常に重要なことだと思いますが、私はそれ以前というかそれと同時にだと思いたいますが、子ども達が学校運営に参画すべきだと思います。子ども達が学校運営に参画していない学校が、地域の人達が学校に参画してくるとい、そのモチベーションになるかという問題があって、今学校って子ども達を指導する、教える場であって、先生達がつくったものの中でやればいいみたいな感覚がまだまだ残っていて、何で子ども達をもっと学校運営に参画させないのだろうかということあ

ります。これも校長先生の考え方にも関わるとは思いますが、学校を開いていくというときに実は二つのプロセスがあって、一つはやはり地域が学校と共にあるということと、やはりそこにいる子ども達を主体者としてもっと、何て言うのかな、尊重して。ここでいう対等の立場というのは、私はまず子ども達と対等になることが、学校を開いていく第一歩じゃないか。そんなことを思います。

○早坂氏

第4回から、途中からではございましたが、本当に参加いただいてありがたいなと、今率直に私感じております。二つ言っていただきました。必要感の問題、ここが腹落ちしなければ学校の先生の負担感でしかないということ。そして二つ目は、地域もちろん大事だけれど子どもに向けて学校をどう開いていくのか。あるいは子どもと共にどう学校をつくっていくのか、この視点がさらに議論されてもいいのではないかとということでございます。

○伴氏

武田先生のお話をお聞きして、今まで霞んでいた景色がはっきり見えてきた気がして…、私も働き方改革ということについては、一個人として疑問に思っていたことも多くて、仕事量の負担感ということは、もちろん、おありになるかもしれないけれど、やはり学校の先生方に専門性を磨いていただく機会をつくること、それから、いい授業をしていただけること、いい授業ができてよかった、子ども達の顔が輝いているという経験をしてもらえることが、何よりの働き方改革に繋がっていくのではないかなということをお美麻の授業を見せてもらうと本当にそう思います。先生達がいい顔をして授業をしてらっしゃるのです。ですから、そういうものを求めていけたらいいなと思っていました。

それから、この教育委員会からたたき台に指し示していただいた三つのステージの中に、私も子どもという言葉がどこにも見当たらないのは残念だと感じていて、子ども達をもっと自分事として自分の暮らしている学校をどうやってつくっていきたいかという声を聞けるような学校になっていけることは、本当に尊いことだなと思っています。

そこで、この三つのステージの練習問題として、私の今一緒に取り組んでいる学校の実践をお聞きいただき、この学校が、どこのステージにあるのか。今どこまで来ていて、何がプラスされればもっと素敵な学校になっていくのかというご助言をいただければと思います、写真を何枚か持ってきたのですが。よろしいでしょうか。

○早坂氏

是非お願いします。ステージがより具体化しますよね。何を今、私達が議論すればよいのか。具体的な実践をお話いただいた方が分かるかと思いますがお願いします。

○伴氏

実は先ほども申し上げましたように、上田市立北小学校で地域と共にある学校づくりを始めたのは10年程前です。クラブ活動の講師を全て地域の人の手で、それから五、六年生の働く学習を

地域の中で、全て地域の中で完結して、事業所から、それから当日の送迎も、地域のボランティアや保護者の皆さんと手を携えて活動を積み上げてまいりました。

活動が始まって5年目ぐらいの時にちょうどコロナ禍になりまして、2020年から少しコロナに収まりが見えてきた頃、学校の中にこのようなコミュニティルームという教室を作りました。

そこは子ども達の支援をするための部屋ではありません。大人のための教室として、大人が学びたいことを小学校の中で実践をしていく。ハード面からのコミュニティスクールに挑戦し始めました。そんな中で大人達が、自分達のやりたいことを実現していくという時間を大切にしたいなと思ったのです。なぜこういうことを始めたかという、地域の大人達にとって、学校に関わることはなかなか敷居が高くて、用もないのに学校に出入りをするというのは、先生達も忙しいし、はばかれるという現状がありました。

しかし、大人達が、大人の教室で「学びたい」を楽しく実現している姿を、子ども達が日常的に垣間見るといことは、大切なことなのかなと思います。これは先々週に完成した竹灯籠の写真です。地域のおばちゃん達が元気に「こんなふうに来上がったよ」と言っている写真です。この時は、教室に入りにくい子ども達も一緒に制作をして、自分の作品を作っておうちに持って帰ったりもしているんですけども、このように大人が楽しく学んでいる姿を、子ども達は日常的に見ています。北小学校はそれだけではなく、先生方の日常の研修に、この写真は、先生達が学校のプールが始まる前に必ず行っている救急救命法や心肺蘇生法に、先生方だけでなく地域の大人や保護者も一緒に入って楽しく学ぶようになりました。この写真は心肺蘇生だけではなくて身近にあるもの（毛布等）で担架を作って運んでみるという、先生もボランティアも保護者も入り交じる。入り交じって楽しく学ぶ、そういう大人の学びの機会も大切にしてきました。

それから、昨年度からは、学校運営委員会の中に児童会の代表が入って、学校づくりについて一緒に、声を上げてもらうようになりました。自分達の学校をこんな学校にしたいんだ。子ども達は、思っていた以上にしっかりと考えてくれました。地域の人達と繋がってこれからも活動をしていきたいとか、逆に地域のために何かできることがないかなとか、地域の人のことを、地域のもののことをもっと知っていきたい、そんな発言もしてくれて。

大人達は、それに対して何ができるかなということをお話合っています。校長先生の経営ビジョンだけではなくて、子どもの意見も大切にしたい運営委員会でありたいなと思っています。

そんな中から生まれた子ども達の発案や大人の知恵を寄せ集めた活動がこの写真です。北小学校の校舎の周りにはこのような松の木が127本あります。この中の何本かに松くい虫の被害が出始めて、そしてこれを何とかしなければいけないねと、地域の大人の学び剪定講座と、子ども達の総合的な学習と交えて、松の木の全てに、松くい虫用のカンフル剤の注入をしているときの様子です。

子ども達はこうやって学校の敷地の中にもこんな課題があって、地域の人とやり遂げていくことで、終わった後に、このように「イエーイ」と言って記念撮影をしました。学校としても、多

分これを業者さんに頼むと300万円はかかるような作業だったのですが、2日間の子ども達とボランティアさんの講座によって、ほぼ無料でこの作業を終えることができました。

そして去年「コミュニティスクールの可能性」というコミュニティスクールと自己肯定感や非認知スキルの関係性についてのアンケート調査を、山口県と兵庫県と長野県では上田市立北小学校だけが参加した調査にさせていただいたときに、なんと、あのコミュニティスクールの先進地山口県よりも、北小学校の子ども達が『日常的に自分達のために頑張ってくれている大人の姿を見かける』『いずれ自分達の手で地域の将来を元気にしたい』の項目で「はい」の回答率が高かったのです。そんなふうに回答してくれたのは嬉しいことでした。

今、私達（北小学校の先生方、地域住民、それからもちろん私）は、（北小学校を）「日本一幸せな学校にしたい」と考えています。

○早坂氏

北小の具体的な実践を見せていただきながら、ステージの有効性を考える、大変重要な事例の提供だったなと思います。

今、伴さんにお話いただいた北小の事例。ハードをまず作って、地域の方がいつでも学校の中に入っていけるようなコミュニティルームを設置したというお話がありました。ハードを、つまり空き教室を、地域の方に開放していくというのは今、様々な学校で行われ始めていますが、そのハードの提供だけではなく、その後に生じるコミュニケーションがそこで生まれていくということを見ると、言われたから学校に来る、言われたから発言をする。自分から何か言いたいことや、やりたいことが特にあるかと言われると、手伝ってと言われるなら手伝えるけど、そうなる前に自分から行くのもなど、そのように考えている地域の方やあるいはそういった地域の方を想定している学校は、このステージで言うとやはり1に当たるんだらうと思うのです。

これを2に上げていく時の階段の上り方、はしごのかけ方の一つに先程の伴さんのお話にあったコミュニティルームというのはとても有効なのかもしれないということを改めて感じました。

ステージ2では、当事者の人達、地域の方も学校職員の皆さんも、あとは子どももそうですけれど、この学校は自分達で良くしていくんだという、当事者性を持って、さあ何かをやってみようと言ったときに、コミュニケーションを主体的に取れる場がそもそもなければ、既にある会議とか既にある活動に入って行く。要は受身の対応しかできないですね。

主体的に自分から学校に関わろうというきっかけになる、そのコミュニティルームはステージ1から2に上げるときに非常に重要ですし、先ほど塩原さんの話にもあった、0から1にという、この視点がやはりとても大事だなと思います。

つまり学校に地域の人が空いている時間に関わっていいとそもそも思っていない方、つまり声もかからないし、そもそも学校が空いている時間に行っていない場所だと思っていない。もう孫も卒業しちゃったし、もう学校は私には関係ないと思っているステージ0の方を学校の中に招いて、一

緒にお話をする。つまり0から1に変えるためにもコミュニティスクール、やはりハードの面でもとても大事だろうなと。そこで重ねられたコミュニケーションによって、中の人達、地域の人や学校の先生の地域との連携協働の意識がどんどん深まっていったりして、そこで主体的に活動が立ち上がっていく。今の話を聞くと、北小学校のようにステージ3にある学校、やはりそのように考えていだろうし、それを支える主体的な地域の方と共に学校づくりが行われているのかなと感じました。

○上沼氏

今の伴さんの話はとても魅力的な取組だなと感動しながら話を聞かせていただきました。やはり地域からすると、学校の子も達の状況が今どうなのかとか、学校が地域に対して何を求めているかというところが、年に数回の会議、学校運営協議会だけではなかなか伝わってこない現実があると思います。

ですので、先ほど河西先生からもありましたけど地域の住民にとっての自己有用感、私達は学校、子ども達にとって必要とされているという、そういう意識を持つことが、地域住民の意識の変化にも繋がって、先ほどの負担感とかやらされているという感覚が薄れていくのではないかと思います。

それと、やはり相互理解がどうしても必要になってきて、普段からその学校の先生や子ども達と地域の方がコミュニケーションを取れるような、そういった場や機能みたいなものができると、このコミュニティスクールの取組は大きく変わってくるのではないかと感じています。

そういった意味ではこの北小の取組は、本当に魅力的で、飯田でもこのように取り組めていたら本当に素敵な学校ができてくるのではないかと感じながら聞かせていただきました。

○早坂氏

とても大事な二つのポイントをおまとめいただいたなと思います。一つは今、上沼さんのお話にあった地域からすると学校ってよく分からないよねという問題です。外からすると何をやっているのか、何に困っているのか、どうしようと思っているのか。ここの地域の子も達をどう育てたいと考えているのか、その声が聞こえないし、姿も見えない。

だけれど、活動に参加することで先生方と一緒に悩んで一緒に動いていく中で、そこが見えてくる。そうすると地域の人達は、教育の当事者として、先ほど教育長の武田さんからも、教師の専門性の話がありましたよね。つまり、教育は誰の責任なのというところで、先生方はまず自分達の責任、自分達の使命だと思ってやっていただいているわけですがけれども、地域の方だって、きっと、この地域の子も達を育てるのは私達の仕事だと、そのように思っている方、少なからずいらっしゃるだろうと。そういった方達の力を学校で生かしていくという意味でも、活動を一緒にやっていくというのは、学校の方々が見えるということに繋がるんだらうと、今、上沼さんのお話にあったかと思います。

もう一点、すごくなるほどと思ったのは、地域の方にも有用感が必要だということです。生きていて、必要とされるということの喜びは、先ほど子どもが必要とされることで学びが深まるといふ河西さんのお話がありましたけれど、地域の人だって同じように、幸せを感じたいわけですよ。ここはやはりとても大事だなと。

今、教育長の武田さんの背景に、「個人と社会のウェルビーイングの実現」という、長野県教育振興基本計画第4期の主目標、最上位目標が掲げられていますよね。子どもだけじゃない、子どももちろんですが、学校の先生もウェルビーイングで満たされたいし、地域の人だってウェルビーイングで満たされたい。コミュニティスクールはもしかしたら、地域と学校が繋がることで子どもにとっても、先生にとっても、地域の人にとっても、このウェルビーイングを高めていくことは、とても可能性のある制度ではないかなと。あとは、問題はこの負担感、必要感をどう先生の腹の中に落としていくか。これはやはり大事だね、やっていきたいねと。一時的にはどうしても負担感は必ず両肩に乗っかってはくるので、この先にある充実感や有用感に向けて、頑張っていこうよと言えるようになるためにも、やはりこのウェルビーイングはとてもキーワードな気がしてきました。

○塩原氏

伴さんと河西さんに教えていただきたいことがあるのですが、最初に河西さんに質問ですけど、自己有用感が高まる、そういった子どもの、その後の姿を見て、若穂中学校の生徒達は、先生方は、どのように変わりましたか。

それから伴さんに質問です。伴さんのプロセスをお聞かせいただいて、北小の先生方は、どのように変わりましたか。教えてください。

○河西氏

今の梓川でも始めてはいて、これで2年目になるのですが。若穂には2年いて、1年目にこんなふうにしたらどうだろうというのをこれまで話してきたことを話をして、最初はとにかく乗ってくれる先生にやってもらう、全校で動くのは厳しいところがあるけれども、やってくれる先生が本気になってやってという感じのつもりでやりました。

一番本気になってくれた先生は、例えば、前にお話したこのリンゴ農家と繋がって、リンゴの木1本1本任せてくれる農家さんというのがあるんですけども、こういうその地域の方の本気を引っ張り出すと、こちらでも考えてもいないことをどんどんやってくれるんだ、ということを示してくれて新聞にも取り上げていただいたので、やはり先生達、他の先生達もそれを見るわけですよ。

負担感のところに关わるのですが、地域の人と繋がるということは先生達にとっては実は未知の世界であることが多くて、そこが最初のスタートですごく負担感を感じる部分ですけど、ここでやったことはとにかく先生達、地域の人と繋がって地域の人から「こんなことをやりたいん

だ」とか「こんなことが課題だ」「君達の力が必要だ」をまず語ってもらう。それだけで子ども達が相当やる気になるという姿を見せてもらったことで、地域の人と繋がることへの精神的なハードルというものがかなり低くなった先生は多かったです。

ただこれが2年目の実践だったのため、この後私は出てしまったので、他の先生方がどれほどその気になってくれたのかまでは確認はできていないんですけれども。ただ地域の人の本気のフィードバックを受けて子ども達が嬉しくて、やる気になって頑張っている姿というのは周りから見ても感じるところで、すぐ分かるため先生達はああいうのをやりたいな、もしそういうふうにできたら自分も楽だよなというのは、私がいろいろ解説しなくても感じてくれるというところだけは間違いなかったなと思っています。

○早坂氏

すごく面白いお話を伺えたと思いました。先生の負担感が充実感、あるいは有用感に、あるいは必要感を伴って変わっていくプロセスは、一番手っ取り早いのはやはり子どもが変わる、子どもの目が輝き出す、子どもの学びが深まっていくその姿を見て、先生方がこれはちょっと面白いことになってきたぞと、地域と繋がることの意味や意義のようなものに初めて腹落ちしだすというところがあるのかなと思います。

○伴氏

昨日の夕方、学校に立ち寄ったときに、教頭先生が愚痴をこぼしてくれました。本来、学校の先生はとて我慢強いのです。愚痴なんてこぼさないのです。でも愚痴がこぼし合えるような仲になってこれたということは、私は幸せなことだと思っています。

それから、北小学校では、今年からコミュニティルームを先生達のために月1回開放することを始めました。何のために開放するかというと、先生方のCSお悩み相談室を開いています。夕方2時間だけコーディネーターがそこで美味しいお菓子と美味しいお茶を用意して待っています。悩みのある先生達はそこに行って、美味しいお菓子、コーヒーを飲みながら自分の授業についてこんな事がしたいんだけど誰か地域にいい人がいるかとか、こんな授業を展開していくのだけれど何かヒントが地域にないかなとか、そんな話をしてもらえる機会が月に1回開かれています。

このように先生方に信じてもらって、頼ってもらって、そんな中で、美味しいお菓子を食べながら話ができる環境になってきたことは、嬉しいことかなと感じています。

○早坂氏

関係性が変わってくる、愚痴をこぼせるようになるというのは、何かとてもいいエピソードですし、とてもこのコミュニティスクールの制度にとっても意義のある事例を出していただいたなと感じました。

先ほどから繰り返されているようにやはり地域からすると学校は顔がなかなか見えにくいですよ。顔が見えにくいと何が起きるかということ、そこで働いているのは当然一人、一人、人生の

ある人間なのだけれども、外から見ると学校全体をシステムとして捉えますよね。送電網や水道管のようにこの世の中を回していかなければいけない仕組みとして、やはりどうしても見てしまって。だからこそ、電気が止まったら電気会社にクレームを入れるかのごとく、地域で何か子どものことがあれば学校に文句を言うような流れが出来上がってしまうのだと思うのですが、当たり前のようにそこで働いている先生には人生があって、先生も有用感を感じたいし、ウェルビーイングで満たされなきゃいけない人間なんですよね。そこが地域の方から見えてというのはとても素敵な事例だなと思っています。

○塩原氏

学校というところは、先生が変わらなければ何も始まっていかない。そういう場所だと思います。簡単に言えば、先生が変われば学校が変わり、子どもが変わる。また、教師力が高まれば学校力が高まり、その中で学校教育目標が実現していく。

ですから、河西さんのお話はとても魅力的だと思います。校長先生の仕掛けによって、学校の先生達が変わっていった。それによって中学生が自己有用感を高めていく。素晴らしい実践だと思います。もう一つ河西さんにお話ししたいのは、そういう校長先生の仕掛けによって若穂中または梓川中で、地域に開かれた教育課程は作られ始めているのかどうか。そこはどうでしょうかね。

○河西氏

若穂にしても、先ほどのリングをやってるその先生と子ども達の姿を見て、いいなと思って地域のお祭りに関わって子ども達が活躍できるようにしたいと動き出した先生がいました。私が最初の時に言ったのは地域連携が学校を立てていく柱になってほしいという話をしたんですけど、梓川に来てそれを同じようにスタートで始めて、研究主任を中心にそれに乗ってくれる先生を中心にとにかく去年1年間でやれるところで、実践して見せてもらって、子ども達が本当に生き生きしているのを、これは本当に先程も言いましたが私が語るよりも見ればわかるので、先生達もいろんな理屈というのは、やっぱりやりたいな、子ども達が幸せになる姿を見たいな、それを支援したいなという気持ちになってくれている人は増えてきているかなという気がします。

グランドデザインには、これがどうなのかというところはいろいろあると思いますが、学校経営理念には「地域とともに歩む」を入れて、これがなかったら学校というのはこれから先どの学校も成り立たなくなってくるだろうという話をしてあります。この「自分の良さを語れる生徒」というところに関しては、下にあるこの地域連携によって、この経験によって、あの時こうであった自分に良さがあるんだ、みたいな、それを教育目標は「強く、優しく、思慮深く」とあるので、あの時の僕はこんなふうに強かったとか、こんなふうに優しくかったとか、こんなに思慮深かったと、自分で語れるようになっていくといいのではないかと話をしてみたり、それから最初にありました地域連携における探究・協働的な学びを教科に生かすということを先生達と共有することで何とかこの意識になっていってけれないかなということ、これも私が言うだけではやは

り効かないので、研究主任にまず理解してもらい、研究主任が自分の言葉で語れるようにという支援が何とかできないかと。いずれにしても頑張っていますので、徐々にこの地域連携でも、学びというものが教科ともリンクしたようなカリキュラムになっていけばと考えています。

○早坂氏

まずはこの学校の負担感の問題、私達が避けて通ることのできない問題です。学校の先生方にしっかりと納得感、必要感と共に腹落ちしていなければ、つまりこのコミュニティスクールが先生にとってどういうメリットがあるのかというところが必要感や納得感と共にご理解いただければ仮に、首長権限でトップダウンし全県の小中義務教育学校に、国型のコミュニティスクールを降ろしたところで、多分何にも意味がないと思うのです。仕組が入ってもそこに、それを扱える人の熟度や練度や理解度がなければ、多分何も機能しない、何も変わらないのだと私はそのように考えていたりします。

また、先ほど塩原さんからは先生がまず変わるのだと、学校が変わるのだと。ここが最初なのだというご発言からは、教育の責任者、あるいは当事者、エージェンシーという言い方をしますけれど、強いエージェンシーを誰が持つべきなのかというところで、学校が大事なのだというお話もいただきました。

そのような中で傳田さんに是非お伺いしたいのは、今、地域の人として、上伊那広域連合で上伊那8市町村の皆さんと共に、郷土愛を盛り上げていこうという活動をされている中で、地域の皆さんのエージェンシーというのはやはり重要だろうと、伴さんのお話を伺っていても感じたところですがこれまでの議論を踏まえて、今、傳田さんのお立場で何かご発言いただけるとありがたいなと思いますが、いかがでしょうか。

○傳田氏

皆さんのとても素敵な議論を聞かせていただきました。伴さんの取組はとても良いことで、先進的で、本当に素敵だなと思うところですがけれども、私は様々な現場を対応させていただく中で、このコミュニティスクールも多くの学校でうまくいってなかったり、難しいと思ってる人達、その方々もできる内容、仕組というものを、先進的な取組から、本質的なところを引き出して、見出していくということがとても求められていて、重要ななと感じています。

皆さんの発言がとても素敵なのですが、私は敢えて現実的な部分も踏まえていい形になっていけばいいなという思いも含めて言わせていただくところがあります。

多くの方はどうしようかな、どうしたらいいだろうということの中で、検討会を聞いてくださっているかなと思うので、あえてちょっと考えさせてもらいたいと思うのは、最初の論点で三つのステージがあったと思うのですが、ステージもとてもわかりやすいものですがけれども、私も高校の学校評議員なので、また少し違うかなと思うんですけれども、複数年6、7年関わらせていただいて。まず、そもそも複数年関わっている人が、何人いるのかという根本的な問題にぶち当たることがあります。伴さんのように複数年、私もそうなんですけれども、複数年見ている

人が数人いるとなると、階段を上ってくれる可能性がある。けれども、実際のところが、いいとか悪いとかではなくて、学年もリセット、リセット。先生方もいいとか悪いとかは全くなく、制度的にも変わって、どんどん変わっていきっていくという仕組みの中で、そういう階段を上っていきけるにはどのような体制があればいいのかというのは、本当に考えたいなと思っています。

複数年関わると、やっていることがわかる。それでどんなふうになったらもっといいのかというのは自然に出てくる、そして具体的に関わる。事例を持っていけばそれをより良くしていけるということで、まさにそのステージに乗っていくのですけれども、先生方も含めてそのように関わり続けられる形が理想だけれども、現実なのかなというのは、とても現実問題としてあるのかなと思ったこと。もう一つの論点で、信州の教育をそれぞれの立場でどうしていけばいいのかというその意識の問題があると思うのですけれども。今、学校の先生や保護者の立場の方々には教育について語るというのは当然だと思うのですが、そもそも社会の未来を担う子ども達を誰が担うのかということだと私は思っていて、社会に出ていく子ども達を、先生や保護者がもちろん責任として担っていただくのは役割としてはとても大事だと思うのですけれども、社会は多くの人っていて、様々な職種もあって、いろんな人で成り立っていて、そこに送り出す子ども達を育てるにあたって、学校の先生だけが頑張っていたとしても、本当にそれがいい形なのかというのがあるのではないかと考えていて。なので、そもそもみんなでもっと関わられるようにしなければいけないのではないかとというのが私の問題提起というか、本当に関わられる人ってどういう人だろうということで、キャリア教育であったり、地域に本当にいる人で、本当に関わられる要素があって、それが単年じゃなく複数年関わって、主体的に関わるという可能性のある人との連携を深めてきたところです。先ほど、子どもも一緒に考えましょうという話がすごくいいなと思ったのですが、子どもも社会の一員だと思うのです。なので、大人もそうですが大人も先生も、私達のようないろんな職種の人も社会の一員なので社会の一員として、みんなで良い社会を作りましょう、次世代のために何ができるかというのを考えるような、先ほど先生がおっしゃっていた0、1の部分の話かなと思っているのですけれども。そういった部分の議論とか共有というのは、なかなか私達もできてないのですけれども、すごく大事かなと思っています。その仕組みとその意識の関係のお話をさせていただきました。

○早坂氏

一つ目の三つのステージの議論、また学校の負担感や充実感、有用感に絡めたウェルビーイングのお話を最後傳田さんのお話で集約していただいた、そんな思いでございます。

誰がこの社会を担う子どもを担うのかという問題。つまり学校だけで、教室の中だけで子どもたちに社会を、世界を見せることができるのか。この課題を学校の先生もきっと困っていらっしゃるだろうし、地域の人にも手を貸してほしいけど、先ほど先生もおっしゃったように、地域って学校からすると未知だったりしますよね。どのように声をかけていいのか、誰と繋がればいいのか

のかよくわからない中の暗中模索が続く中で、今、コミュニティスクールの可能性というのはとても高まるのかな、そんなふうにしたところでは。

もう一個傳田さんのお話を私なりに集約すると、要はみんなが当事者にならないといけないということですね。学校の先生は職業柄、子どもの教育を担うのだという使命感も責任感も、専門性もお持ちなんですけれど、果たしてこの地域にいる我々はどうか。私達が、みんなで子どもを担っているのだという意識が、どのようにしたら広がっていくのか、またそれをどう持続可能な形にしていくかという問題ですね。

今までいろんな会議に充て職で出てきた地域の方やPTAもそうかもしれませんが、ご自身の子どもがいるときはPTAとして関わられるけど卒業した後、はてどうしようか、継続したいけれども子どもが卒業したからお役御免かなと思っている方も中にはいるかもしれないですね。でも地域に関わって目覚めた保護者達が継続的に関わるような仕組みというの、ここもぜひ考えていきたい。それを今、傳田さんはキャリア教育の視点でやられていると。面白いですね、キャリア教育。それぞれの人間ってやはり仕事をしているので、仕事に絡めたら、地域の人みんな何か子どもに伝えたいことが必ず出てきますもんね。自分として、個人として、と言われると、いや大したことできないけどという人も、ご自身の仕事に絡めていただければきっと子どもとの接点、教育との接点が出てくるのではないかと、そのように感じたところです。

二つ目の論点をぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

それは、ここまで事務局で提案していただいたコミュニティスクールのステージ論がありました。地域の人も学校の先生も子どもも、校長のビジョンも0から1へ、1から2へと少しずつステップアップしていて、今、自分がどこにいて、次に目指すべき方向が何なのかというのを全員で見える化しておく、より活動は深まるかもしれない。そこに願いを込めたモデルでありました。

ここで皆さんに改めてぜひご意見いただきたいのは、ステージ3、一番上のステージですね。地域も、学校も対等に、教育に当事者意識を持って参画することで、関係者みんなが有用感を持って、全員がウェルビーイングで満たされる。まさに個人と社会がこの信州でウェルビーイングが実現していく。その活動にコミュニティスクールが使えるのだとした時に、全県で2017年（平成29年）に全ての小中義務教育学校に信州型のコミュニティスクールが入りましたね。そして今文科省の発表によると、長野県は他2県と合わせて3県、全県で国型のコミュニティスクールの導入率でいうとワースト3に入っている県でもあります。

私達はそのまま独自路線を貫いて行って良いのかという問題。つまり、子どもにとって良い教育を、先生にとって幸せな学校を、地域の人にとって有用感で満たされる学校と地域を、ということを考えていったときに、国型じゃないと駄目なのか。あるいは信州型でもいけるとこまでいけるのか、その辺は皆さんどうお考えなのだろうと思って。もし信州型でも最後のステージまで行けて、かつ学校と地域が充実し、みんなが幸せになるなら国型を進める積極的な理由はなくな

っていくわけですが、特に国型でなければどうにもならないと思うポイントを何かお持ちの方がいたら、共有していただけたら、そこはすごくどうなのかと、知りたいなと思っているポイントでもあるのです。ということで、国型じゃないと駄目なのと言われたときに、国型の方がいいんだよ。あるいは国型でなくても大丈夫だよ。どちらの意見でも結構ですが、今の皆さんのご意見を聞かせていただきたいなと考えています。

○伴氏

お話をさせていただいた上田市立北小学校ですが、実は信州型コミュニティスクールです。上田市は国型のコミュニティスクールが2校だけ、市内36校中2校だけあります。しかし、それ以外の学校は、信州型のコミュニティスクールです。

（国型も信州型も）何ら違う活動をしているとは思えませんが、教育委員会は、（信州型コミュニティスクールである学校の）令和6年度の学校運営委員の名簿を持っていません。

国型の学校運営協議会制度を導入している学校は、特別職の公務員として上田市教育委員会が任命をして、委嘱状も教育長がその学校に携えて委嘱をしているのですが、それ以外の学校は、名簿すら持っていないってこのギャップ。活動そのものにギャップはないのですけれども、それで伴走支援と言えるのかなと感じることはあります。

地域と共にある学校づくり、学校を核とした地域づくりを進めていこうと言っている時に、信州型CSの名簿すら持たないのは残念だなと思います。ある時「どうしてそれぞれの学校にコミュニティスクールについて、上田市教育委員会はCSの取捨選択を学校任せにしているんですか」と質問をすると、県教委が、県が進めるべき方向性をしっかり指し示していないので市教委として方向を指し示せないという返答がありました。

もしそうなのだとすれば、現在、長野県の地域と共にある学校づくりがこれだけ進んでいて、地域学校協働活動が充実して、公民館王国の長野県であって、教育長も信州教育は地域と共にあると言ってくれるのであれば、次のステージに向かうために、長野県はどういう方向を、市町村教育委員会に対して指し示すのか、ということをやはり明らかにしていっていただけたら、市町村教育委員会もシフトを変えられるのではないかなという気はしています。

○早坂氏

信州型、国型というところでいくと、皆さんに今お考えいただいているところでということなのですが、少し1分ぐらいでおさらいしておきたいなと思うところです。どちらも地域と学校を繋げて、地域と共にある学校作りを推進していくという理念は変わらない。これまでの学校教育が、校長がその学校運営の基本方針の策定であるとか、学校運営の最高責任者が学校の校長先生でした。これは信州型だろうが国型だろうが変わらないわけです。学校運営の責任者は引き続き校長です。コミュニティスクール、特に国型となると、学校運営を考えていく際に、地域の方、あるいは企業、PTAの方も含め、私のような大学教員や多様な方が学校の中に入って、共に学校の先生と学校の運営の方針そのものも一緒に考えていく。これが国型、そしてその一緒に考えてい

くという行為そのものが先ほど伴さんにもありましたけれど正式にその立場を教育委員会から委嘱されて、地方公務員特別職として自分の明確な立場と共に学校の中に入っていくこととなります。

学校運営協議会のメンバーには法的な権限が与えられて、その法的な権限のもとで学校運営の基本方針を校長が策定したものを一緒に議論したりそれを承認したり、それに対して意見を言ったり。「この学校ICTちょっと先生方が困っていそうだから、ICT強い先生来てくれたらいいよね」と教育委員会に意見具申してみるね、なんていうことが法的な権限として与えられているのが、国型のコミュニティスクール。こういった法的な権限がなく、かつ教育委員会からの委嘱もなく、立場として公務員特別職になるわけでもない。要は地域のお助けメンバーとして委員に入っていく。これが信州型のコミュニティスクールです。法的な権限の有無というところが、一体その教育を良くしたり、先生が幸せになったり、地域の人が有用感を感じたりするときどのくらい意味があるものなのか、ここを皆さん、どのようにお考えなのか、実践的にでも理論的にも構わないですけど、ぜひ引き続きご意見をいただけたらと思います。

今、実際国型のコミュニティスクールにダイレクトに関わっている塩原さんの大町市立美麻小中義務教育学校が頭に最初に浮かんだのですがいかがでしょうか。信州型、国型と言ったところで、国型をより推進していった方がいいのか、あるいは信州型でもかなりのところまでいけるといふ思いがおりなのか、そこについては塩原さんいかがでしょうか。

○塩原氏

大変難しい問題だと思います。結論から申し上げますと、最初からお話しさせていただいているとおり、校長先生のマネジメント力が高まるならば、どちらでもいいと思います。

大町市では、全小中学校、それから義務教育学校、国型で進めさせていただいておりますけれど、やはり校長先生のマネジメント力はその中で高まってきています。具体的には、校長先生の発するビジョンですよね。地域の学校になろうとする。また地域の学校をつくろうとする校長先生のビジョンに触れて先生方の意識が変わっていく。そういう流れが大町市ではできております。完全にできているわけではありませんが、校長先生のビジョンが先生方を変え、そして子ども達を変えていくというそういう流れができているため、大町市としては国型でやってよかったなと思っております。

ただし、様々な問題も出てくると思いますので、県がどうだこうだというよりは、市町村教育委員会が地域の学校をつくるために、どうしていくことが望ましいのかというように考えるべきだろうと思います。武田さん、いかがでしょうか。

○武田教育長

話をいろいろ聞いていて、まず思うことの一つは、信州型コミュニティスクールと言って10年ぐらい前からかな、長野県独自で始めてきているのですけども、それが長野県内の多くの学校、

一時期は全ての学校だったと思いますが、全ての学校が信州型コミュニティスクールになったからそれでいいって話ではないということですよ。

つまり、信州型コミュニティスクール自体が進化していかなければいけないのではないかと、ということです。そうすると長野県型の信州型コミュニティスクールを次の段階として、進化系の信州型コミュニティスクールを提案していくとか、しないといけないんだろうなということは強く思います。今日は話を聞いていて、非常に参考になったのはコミュニティルームです。

私も伊那中学校の校長でいたときに、地域の様々な人から学校は敷居が高くてね、と言われるため、敷居を低くするためにはいつでも誰でも学校に入れるようにしようと思って、空き教室に市でいらなくなった畳を引いて、そこに地域の人がいつでも来れるような部屋を作ったのですが、結局、あまりうまくいかなかったのです。また、伴さんにお聞きしたいのですが、どうやればそこに人が集まってくるのかというノウハウが聞きたいのですが。

二つ目のこのコミュニティルームの良さは、先生達が普段から地域の人を見て関わるということが地域の人が学校に入ってくる、何か抵抗感を薄くしていくと思いますよね。普段からいるのですから。子ども達も、多くの場合は高齢者の方だと思うのでおじいさんおばあさんのところに行って話をするということが二つ。

三つ目。とても今日話を聞いて大きな要素だなと思ったのは、そこが先生達の愚痴をこぼす場になるということ。先程から先生達が多忙と言われていますが、一番は先生達が心の中に溜めている愚痴をこぼせる場がない。ストレスというのはそこから出てきていると思うのですが、学校の中で愚痴をこぼしませんよね。利害関係がありますから、先生方同士。家に帰って家族にもなかなか言えないですよ。そうすると、そういう先生達が吐き出す場に入っている近所のおじいちゃん、おばあちゃんのところに行って、こういうことで今困っているという、先生達がもし言える場になるとするとすごく意味がある場だと思って、このコミュニティルームを長野県に広くつくっていくことは一つ、これから進めていける大きなポイントだと。特に山間小規模校においては、高齢者の方々のコミュニティセンターとして学校があるということがとても重要な要素だと。

それからもう一つは、長野県の信州型コミュニティスクールが進化していくもう一つの側面は、北小でもやっておられるのですが、子ども達が学校運営に参画していくということです。こういったことを含めて、それは国型でも信州型でもどちらでもいいと思うのですが、もう少し地域連携型とか地域参画型とか、学校が開くということをレベルアップするためにどういう視点とか、どういう要素を持っていくかということは少し考えていかなければいけないなと。今日様々な議論を聞いていてとても考えさせられました。

塩原さんがずっとおっしゃっている校長のマネジメント力というのは、これは教員の研修を行う責任者である県教委の第一義的な課題なので、そちらは県教委も十分課題意識として持っているかなければいけないのだろうなということもあります。

○早坂氏

信州型が始まってこの10年の間、次のステップとして進化が必要なのではないかという話を今いただいたところです。進化の方向性につきましては、教育長の武田さんの後ろにある「ウェルビーイング」は一つの大きな方向性として私達共有できるものだろうなと感じています。

子ども達の幸せ、先生の幸せ、地域の人達の幸せ、保護者の幸せ、あらゆる人達の幸せが学校でみんながこう繋がっていくことによって実現していく。そこにコミュニティスクールの更なる進化の方向性が一つ見えてくるのかなと思っているところです。

一つだけ話題提供させていただきます。参画のはしごが今回事務局説明の資料の中にございました。0から1へ、2から3へというようにこれまでやらされていた立場の人が自分からやっていくように変わっていくと、当事者性を高めていく、醸成していくときのプロセスとしてよく使われる「はしご論」です。これは「子どもの」というように右下に書いてあるとおり、今まで教師主導だった授業を、子どもを当事者として作り変えていく、位置づけ直していく時の考え方として大変有効で、先生が出してやらせてというその関係性から子ども発の学びをどうつくっていくのかというところ。そこにこの「はしご論」の大きな意味があります。私達がこの「はしご論」の子どもを地域の人達と読み替えて、このコミュニティスクールのステージを今回作ってきたとそういった経緯があります。

今まで学校から言われて、ちょっとこれは手伝ってほしいけど、地域の人と言われて仕方ないなと言って重い腰を上げていくというタイプの「言われて参加型」の地域と学校の連携から、共に愚痴をこぼし合いすぐそばまで学校の中に入って行って、先生方と共に子ども達と一緒に支えていく仲間として、常にそこにいる当事者性を持った人に上がっていくというのが私達の考えているコミュニティスクールのステージ論です。

このハートの段階の一番上にある7段階、8段階というのは実は権限の委譲が不可欠だということが理論的には言われています。つまり今までの関係性のままでは必ず頭打ちになるのだと、どこかで当事者意識を持って、前のめりに参加してもらうためには、その相手にこれまでなかった権限を渡していく。例えば、教育長の武田さんが言われていた子どもを学校の主体として位置づけ直すとなった場合は、それをただ学校の先生方の認識として変えていくだけではなくて、学校づくり、授業づくりの権限として子どもに渡さなければいけないものがあるというのがこの「はしご論」です。この権限というのが実はかなり上のステージに上がる時のキーポイントとして位置づけられていて、今、文部科学省が国型を全国的に推進しようとしている理論的な根拠にもなっています。

つまり地方版のコミュニティスクールでは必ず頭打ちするから、どこかの段階で、つまり進化型として権限を委譲する、権限を渡した形でのコミュニティスクール、学校運営協議会制度が必要だというのが、理論的にはそのように言われているというところを共有をさせていただきたいなと思います。

ここまでのところで、ぜひ皆さんからも一言ずつ国型、信州型あるいはこれからのコミュニティスクールの進化の形をご発言いただけたらありがたいなと思いますがいかがでしょうか。

○堀田氏

今日いろいろなお話を聞いてとても勉強になったのですが、実は前回早坂先生の講演を聞いた時に、自己決定理論というのが出てきて、繋がりと有用感と自律性、これがとても大事だよということが出てきます。それと今のお話が少し繋がったのですが。

実は前任校で1年ちょっとですね、とても学校がうまくこのコミュニティスクールが乗って。自分はその学校から離れてしまったのですが今現在、地域の方も参画くらいまでいって関わってくださっているところがあって、今日是非その実践を聞いてもらおうと思って、パワーポイントをまとめたのですが時間なくなってしまったので、できればまた次回発表させてもらえばありがたいのです。

今の形式的な参加から対等の参画に行くことと、その自己決定理論と自分の実践と全部繋がって、これはこうすればうまくいくんだというのは、ちょっと見えてきたものがあるので、また是非紹介させていただきます。今やっているのは国型ではなく信州型でやっているのですが、信州型でも結構そこまでいけるんだぞというのはありましたので、また紹介させていただきます。

○早坂氏

自己決定理論についてはこの会議の第3回の際にも皆さんと共有をさせていただいたかなと思いますが、私達がウェルビーイングを感じる時、何を心理的に、要は心にあるコップの何を満たしてかなきゃいけないのか、ここが心理学でかなり見えてきたものがあるということで共有をさせていただいたものでした。

一つ目が繋がり、二つ目が有用感、今日のキーワードになっていました。そして最後が自律です。自分で考えて自分でやれるという、この三つが実現したとき、私達は文化の違い、宗教の違い、歴史的な背景の違いを超えて、ウェルビーイング、幸せに満たされる、多幸福感に満たされる生き物であるというのが今のところ心理学の定説となっています。

長野県でウェルビーイングを個人、そして社会で実現させようとするときにどうやって繋がりを産もうとするのか。どうやって一人一人が有用感を感じられるようにするのか、どうやって一人一人が自分の頭で考えて、自分の立場から見える世界をみんなと共有して世界に関わろうとするのか、地域に関わろうとするか、学校と関わろうとするのか。この3点を、教育振興基本計画を推進していく上で、私達は考えていく必要があるだろうし、これを進めていく上でコミュニティスクールはかなり有効な方法の一つなのかな、そんな感じがしております。

○城村氏

信州型、国型となってくると、本当に皆さんの領域かなと思うので勉強させていただき、ありがとうございます。

子ども達がより学校、あるいは授業、地域に主体的となること、本当そうかなと思います。僕自身も高校の方で講師として6年目になってきましたけども、昨年、伊那中学校の文化祭に呼ばれて、うちの講座の話をしてほしいということがありました。これは僕ではなくて、生徒の方に任せたのです。うちの講座は本物の結婚式をつくる授業をずっと毎年やってきているんですけども、そのときに高校生達にどんなゴールを目指すかと聞いたときに彼女達が言ったのが二つでした。一つが高校生ってカッコいいなと思わせたい。そしてもう一つが中学校を卒業したときに、赤穂高校に行きたいと思わせたいですと言ったのです。僕、とても嬉しかったんですね。どんなふうに上手に発表できるかとかそういうことではなくて、何か自分達のこの経験や発表を通して中学生達が輝いてほしいな、ウキウキしてほしいな、私達の学校に来てもらえたら最高に嬉しいなという。結局、赤穂高校の倍率を見た時高くて、それを高校生がすごく喜んでいるというのは、それがとても僕は嬉しかったのですけども。本当に自分事として生徒達が主体的に関わっていたときというのは、大人というのは側面支援をちょっとやるだけで、生徒たちがガッツと動いてくれるのは僕も経験としていつも見させてもらっています。

そういった意味で、コミュニティスクールという地域もちろんそうですけども、子ども達、児童生徒達が本当に主体的に関わっていくのは大事かなと思いました。

もう一つは、大人ってどうしてもゴールを決めがちで、もっとゴールが変わってもいいのかなとちょっと聞いていて思いました。地域と一緒に考えながら、あるいは子ども達と一緒に考えていった先に、僕はよく言うのですが答えはAでもBでもCでもいいのかなというのはちょっと聞いていて思いました。

こうでなければいけないというゴール設定ではなくて、何か一緒に考えていった結果、それぞれの学校やそれぞれの地域の中でのコミュニティスクールの形というのは、多様であっていいのかな、濃淡があってもいいのかなというのは、今日の話聞いていて思ったところです。

○早坂氏

ゴールは違っていいのではないかと、みんな考えていくことそのもの、答えを一緒につくっていくプロセスが、このコミュニティスクールなのかもしれないというのはなるほどと思わされたポイントだったと思います。

今回からご参加いただいた教育長の武田さんからも、最後一言いただけたらと思いますがここまでの議論を踏まえてっていうところではいかがでしょうか。

○武田教育長

今、長野県に限らずいろんなところに教育上の課題があり、先程の働き方改革とこのコミュニティスクールがあったのですが、もう一つの大きな観点として、教員不足という社会問題です。この働き方改革とか教員不足とか、教員の学校の置かれている環境とか状況を変えていくというか少しでも前に行くには学校を開くということが最重要だと思うんですね。学校を開くということは地域に開いて、地域のカもお借りするし、一緒に学校をつくっていくということになって

いくのだろうと思いますけど、やはり学校を開くことは、勇気であったり、飛び越えるところできないのが現状なので、多分開けば、その瞬間にはいろんなことが入ってくるので、それをマイナス情報もいっぱい入ってくるだろうし、そのことに対するやはり警戒感のようなものがあると思うけれど、先程から話が出ているようにそのステップが上がってきたその先にこういう学校の像があるんだよ、こういうふうになっていけばあなた達はもっと楽しく学校の学校生活ができるんじゃないのという提案の仕方をしていかなければいけないんだなということを今日お話を聞いて強く思ったところで、どうしても、県教委や教育行政から出てくるのは今こういう課題があるから何とか対応しろという、その対応があるから何かを求めているのだけれど、その先にこういうものをみんなで夢見ましょうという話をやはりもっとしていく必要があるなと今日の話で感じさせていただきました。ありがとうございました。

○早坂氏

その先に見える学校のイメージを共有していく、ここはやはりとても大事なポイントをおまとめいただいたかなと思います。そんな形で私達のつくっている学校運営参画のステージ論が学校に伴走支援していく時に、いろんな形で学校を励ます方向で学校を無下に外から評価するとかではなくて、「まだ第一段階なの」「第2段階に上がらなきゃ駄目だよ」というのではなくて、今ある学校の活動にしっかり寄り添いながらこの先に見える、いいイメージを共有しながら共に歩んでいくことが、このコミュニティスクールの文脈ではとても大事になるのかな、そのように感じた次第でございます。ありがとうございました。

それでは本日もとても熱い、また意義深い議論を皆さんからご提供いただきました。今日も本当にありがとうございました。それでは、事務局の皆さんお返しいたします。

○市村課長

本日もそれぞれのお立場から、本当に貴重なご意見をお伺いいたしました。ありがとうございました。

本日お出しいただきましたご意見をまた事務局の方で整理いたしまして、次回に繋げてまいりたいと考えております。次回第5回のコミュニティスクール検討会につきましては9月にまたリモートにより実施予定としております。

それではこれもちまして、第4回のコミュニティスクール検討会を閉会いたします。

皆様本当に本日はありがとうございました。